女とカツオぶしは堅いほど良し
寒ブリ寒ボラ寒カレイ
カツオは刺身、刺身はカツオ
木によって魚を求む
コイの滝登り
コチの頭は嫁に食わせろ
五月のくされダイ（五月＝旧暦の五月）
桜ダイ桜ウグイ
雑魚のととまじり
サバの生き腐れ
サバを読む
水魚の交わり
俎上のコイ（俎はまないた）

タラ汁と雪道は後がよい
土用の丑の日にウナギを食えば薬になる
土用のスズキは絵に描いてなめても薬
どてら質に置いても初ガツオ
夏はカツオに冬はマグロ
逃げた魚は大きい・釣り落した魚は大きい
ネコにカツオぶし
ひょうたんナマズ
フグは悪女でタコの味
フグは食いたし命は惜しし
水清ければ魚住まず
山芋変じてウナギとなる

参考文献
『魚の図鑑①②』（岩井保著保育社）◆『有明・玄海のさかな』（高木正人著凸版印刷株式会社）◆『水に生きる会　会報2』（副島印刷）◆佐賀県水産室『佐賀のさかな』（福博印刷株式会社）◆『魚の世界』『ふるさとの魚名鑑』『魚の方言』（佐賀新聞社）

第二編　はるかなる昔

第一章　原始のころ

第一節　概説

原始時代とは一般的に、人類の誕生から文字と金属器の使用、都市的、階級的な国が成立する前までの期間を指すという。

人類に似た動物がサルから分かれたのは一千万年以上前であるといわれている。その発生地はアフリカといわれてきたが、一九七七年（昭和五二）にパキスタンでも化石が発見され、アフリカ以外にも人類発生の地があることが明らかになった。しかしこの人類はここでいう原始時代の人類とは違い、一般的には猿人（えんじん）と呼ばれている遠い昔の人類に似た直立歩行もする哺乳（ほにゅう）動物であった。

現在の人類に近い祖先は二百万年前、あるいは百万年前に出現したといわれている。一九六五年（昭和四〇）五月、中国雲南省元謀県で猿人の歯が発見された。歯は百七十万年前のものであることが測定されたという。

六十万年前の第三紀鮮新世（前期旧石器時代）中ごろには原始人類が出現。ずっと下って三万年前までの第四紀の洪積世（こうせきせい）（氷河期＝中期旧石器時代）から沖積世（ちゅうせきせい）（後期旧石器時代～現代）の初頭ごろにかけて、身近な先祖の現生

人類が出現した。

とにかく人類は、孤立して生活する動物ではなく、直立歩行し群居を基本とする動物。すなわち、家族生活をする動物であって、その家族は父、母、子という地位があり、家族は集団の中で生活し、集団はムラをつくり、クニをつくって原始社会が誕生していった。そこには秩序を維持する統率者も現れた。

現在地上に住む人類・ヒトはホモ・サピエンスという一種類だけだという。猿人から現生人類に至るまでの過程で、人類は（一）洞窟生活、原始的石器を使い、原始的採集経済。（二）五十万年前ごろからは洞窟生活、石器製作（剝片石器、石核石器）、火の使用開始、あるいは言語の使用も始め、原始的採集、狩猟、漁労経済。（三）三十万年前ごろからは洞窟生活は続けたが、剝片石器、石核石器を使用、埋葬の風習も出はじめ、狩猟が重要性を増し、（四）五万年前ごろになると細石器、骨角器の製作、弓矢、投げ槍、鉤の発明などで狩猟、漁労技術が進み、原始交換経済が始まった（以上を前、中、後期旧石器時代という）。（五）一万年前ごろになると現在の人種のネグロイド（黒色人種）、コーカソイド（白色）、モンゴロイド（黄色）の区別が明確化し、氷河は後退して気温温暖化に伴い漁業が主体となり（貝塚）、原始的植物栽培も開始、竪穴式住居が始まり、民族的社会が形成されていった。また粗製磨製石器や土器が出現した（中石器時代）。（六）五千年前ごろになると磨製石器が使われ、青銅器使用のあけぼのともなり、農業、牧畜が開始。交換経済も盛んとなり、それまでの移動生活から定住生活に変化、階級分化も進んでいった（新石器時代）。（七）三千五百年前ごろになると青銅器の使用が盛んとなり、シャーマニズム的宗教が現れ、民族共同体がしだいに村落共同体に成長していった（青銅器時代）。エジプト文明、メソポタミヤ文明が誕生し、インドでもインダス川流域に都市が発生。そして（八）二千年前ごろには鉄器使用が始まり、文字が発明され、国家が成立していった。中国では殷王朝が誕生し、黄河文明が発生した。

以上が大体、紀元前の人類社会の文化の進展状況だが、日本の原始時代について石器、縄文、弥生の時代区分で原始社会を追ってみることにする。

参考文献　『佐賀県史』、『平凡社百科事典』、三省堂『世界史年表』ほか。

第二節　日本国土の誕生

第一項　地球の歴史

この緑の地球上で人類はどのように進化してきただろうか。生物はいつ、どのようにして発生したのだろうか。その前にごく簡単に、地球の歴史について述べてみよう。

地球が誕生したのは四十六億年前だという説が有力。宇宙空間にただよっていた隕石が衝突を繰り返しながら地球はつくられていったという。衝突した際に生じた熱エネルギーで地球内部は熱くなり、隕石を溶かし、熱で溶けた物質は軽くなって地表へと進み、この溶岩・ガス・水蒸気が地表から噴き出す。これらのガスが集まって始原大気がつくられ、水蒸気は雨となって地球上にたまり、始原海洋になったといわれている。

この始原海で生物が誕生したと考えられている。アミノ酸などの有機化合物の合成と分解がうまく調和して生命の発生になったということだ。

最初の生命であった原始的単細胞生物は、二酸化炭素を吸って酸素を出していた。約三〇億年前の藍藻やバクテリアの化石が南アフリカから発見されたが、これが現在最古の化石となっている。これら光合成をする植物が増加し大気中の酸素が増加した。七～八億年前、大気中の酸素と二酸化炭素の量が等しくなったと推測されている。

六億年前以降になると動物がふえてきたが一番進化していたものでも軟体動物であった。それから古生代、中生代、新生代へと動植物の進化が早まっていった。

第二項　日本列島の誕生

飛騨地方には、日本で一番古い先カンブリア紀（六億年以前）の岩石が分布しているといわれてきた。事実十七億年前の岩石が発見されている。※四億年前のシルル紀の化石が北上山地、飛騨地方、高知で出ている。

二億年前ごろには本州を中心とする地域は、海が干し上がって長大な山脈が姿をあらわしていた。この現象は造山運動によるもので、こうして本州の土台がつくられていった。

一億九千万年前のジュラ紀から白亜紀、新生代の七千万年前の第三紀の時代になると、日本列島の土台が拡大した。石炭はこの時代の植物の置きみやげであった。ジュラ紀は海の恐竜が栄えた時期でもあった。

白亜紀の変動が日本海側に起こり、陸地が広く陥没。そこに湖ができ、さらには火山の大爆発で造山運動がおきて、日本列島は大陸の東端を形成した。

第三紀には古い型のカバやサイなどの哺乳動物が栄え、グリーンタフ（緑色凝灰岩）造山とよばれる変動が起

きて日本海が誕生した。

弓なりの形をした今の日本列島ができ上がったのは、五百万年前からはじまった新しい地殻変動によるものといわれている。新しい型の哺乳動物の時代で、サルの仲間が栄えた時代でもあった。大陸には、三指馬や東洋象も栄えた。

二百万年前の洪積世は第四紀とよぶ時代であり、人類が進化していった時代であった。氷河時代でもあり、一万年前まで続いた。アジア大陸の一部であった日本列島に、北からも南からも人類が出入りし、複合民族としての日本人が形成されていった。

※藤田至則『先史時代の日本と大陸』「日本列島のおいたち」

第三項　日本国生みの神話

古事記や日本書紀の神話は、神々の系譜や神々の行動が国土に密着して展開し、皇室神話に統合されたものといわれている。『古事記』は和銅五年（七一二）に、『日本書紀』は養老四年（七二〇）に完成した。

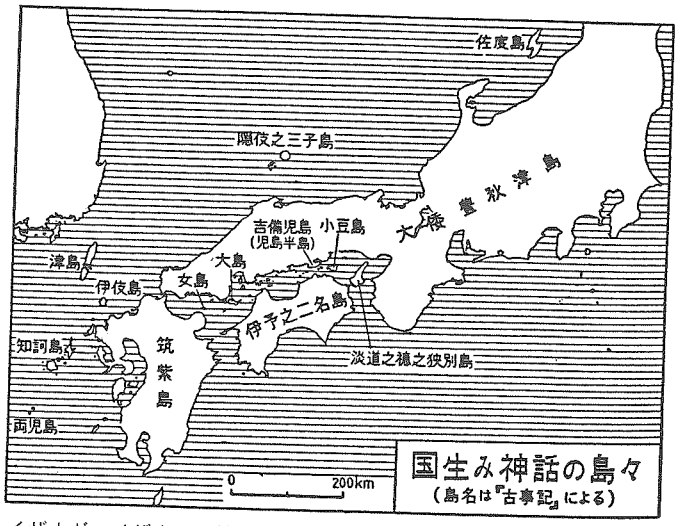
記紀神話による国生みの神話は、伊耶那岐、伊耶那美両神の結婚で始まる。淤能碁呂島に天降った両神はここで結婚式をあげる。最初は失敗して水蛭子を生んだので、天つ神に指示を仰ぎ、こんどは夫唱婦随で結婚をやり直してみごとに大八島を生んだとある。この国生みは天の沼矛を指し下してかきならす両神のかみわざであった。大八島は、(1)淡道之穂之狭別島（淡路島）、(2)伊予二名島（四国）、(3)億岐島（隠岐島）、(4)筑紫島（九州）、(5)伊伎島（壱岐）、(6)津島（対馬）、(7)佐渡島（佐渡）、(8)豊秋津島（本州）の順に生まれた。

両神は「私たちはすでに大八島国や山川草木を生んだ。次は天下の君たる者を生もう」と協議し、日神（天照大神）、月神（月夜見尊）、素戔嗚尊と火神（軻遇突智命）を生んだ。このようにして国生みが終わると、次の神々の出生へと神話は進んでいく。

第三節　旧石器時代の人々

第一項　猿人から新人まで

「人間の歴史は、どこまでさかのぼるのだろうか……」「人間の生活や文化はどのように進歩発展してきたのだろうか……」ということは興味あることである。このような興味や疑問が追及され、科学的な学術研究によって徐々に歴史の解明がされてきた。もちろんまだわからないことが数多くあり、今後の研究でますます鮮明に人間の歴史が解明され、今後の人間社会の発展に寄与していくことであろう。



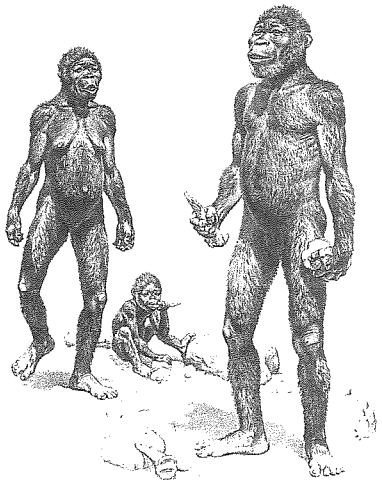
イザナギ、イザナミの神のまぐわいによって生まれた神話日本の島々

一　一番古い人類の祖先は

最古の類人猿　一九二五年（大正十四）、南アフリカ共和国のベチュアランドで、石灰洞の中から若い類人猿と思われる頭蓋骨が発見された。この骨の脳量は五〇〇cc程度と推定され、人類より類人猿に近く、ゴリラぐらいであるといわれた。

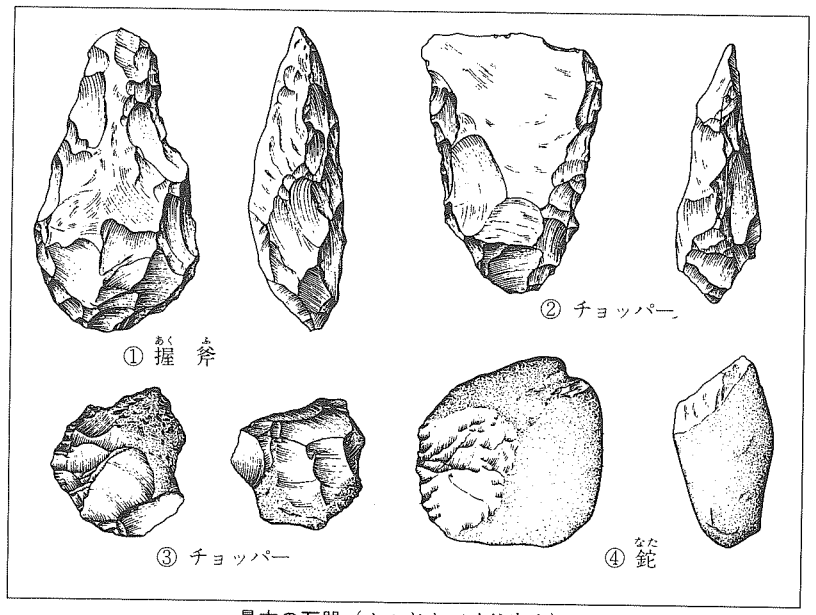
これを調査したダート教授は、「アウストラロピテクス（南の類人猿）」と名づけた。そして、一〇〇万年前から六〇万年前に生息し、人類と類人猿の中間的なものであろうと推定した。しかしその後の研究で、二〇〇万年から一七五万年前の猿人であることがわかった。その後新しい発見も加わり、生活の様子もしだいに明らかになってきた。アウストラロピテクスは、狩りと採集を行い、岩ウサギやモグラなどを捕え、草や木の実などを食料にしていた。また彼らは、河原石の一端を打ち欠いただけの礫石器を使用していたことも明らかになった。

エチオピアで発見された三〇〇万年前の化石骨「ルーシー」は、もっとも古い猿人であるアファール猿人であるといわれているが、このアファール猿人が二つの系統に分かれ、一つは原人につながるホモ・ハビリス、他の一つはアフリカヌス猿人になったという。アフリカヌス猿人はその後ロブストス猿人、ボイセイ猿人とに分かれていくが、一〇〇万年前には絶滅したと考えられている。


アウストラロピテクス

石器文化　ケニアのKBSという猿人段階の遺跡では、石器とともに、ヤマアラシ、イノシシ、カモシカの骨が発掘され、二六〇万年前という年代をもつといわれている。猿人段階に、製作のはじめられた小石の一端を打ち欠いで刃をつけた石の道具の伝統は、一五〇万年も続いている。この時期の石器は、片面礫器（チョッパー）が過半数を占め、掻器、多面体石器、円盤状石器が多い。

タンザニアのオルドウバイ谷において、一三〇万年から一二〇万年前の石器群が発見された。ここでは、握斧（ハンド・アックス）が過半数を占め、片面礫器、球状石器、円盤状石器、掻器などの石器が確認されたが、これらは以前の礫器文化から進歩した、握斧文化とよばれている。この握斧を主体とする文化は、一〇〇万年も続いている。これらの石器は、直接狩猟に使用したのでなく、動物の解体用であると考えられている。狩猟用具は、燃えさしの木棒とか、礫塊などであった。



最古の石器（オルドウバイ谷出土）

二　原人の文化

猿人から原人へ　中国北京の南西方・周口店近くの竜骨山から発掘された化石人類として有名な北京原人（シナントロプス・ペキネンシス）の化石は、今までに四十個ほど発見されているが、五〇万年から二〇万年前の間のものであるとされる。石器は、礫器、掻器、尖頭器、彫器などで構成されている。猿人から原人（ホモ・エレクトス）への進化は一五〇万年前に起こり、すでに火を利用していたことが知られている。

ジャワのトリニルで発見されたジャワ原人の研究も進んでいる。五〇万年前のジャワ原人の時代に、片面礫器や両面礫器（チョッピング・トゥール）の礫器が、東南アジアで使用されていたことが確かめられた。ケーニヒスヴァルト博士は、掻器、尖頭器、錐などの剥片を主体とする石器群はジャワ原人の石器であり、インドネシアと中国において、剥片伝統が出現したと主張している。

参考　『世界の石器と日本の石器時代＝石器の基礎知識Ⅱ』（加藤晋平、鶴丸俊明著・一九八〇年）

北京原人復原像

三　旧人の文化

原人から旧人へ　原人からホモ・サピエンスやネアンデルターレンシスなどの旧人への進化は、三〇万年から二〇万年前に起こったと考えられている。中国の山西省丁村遺跡から出土した石器では、大形の掻器がきわめて多く、三稜尖頭器や両面加工の長楕円形の握斧が確認されて、以前の礫器、球状石器、握斧が減っている。これらの石器とともに、毛サイ、メルクサイ、徳永ゾウなどの獣骨も出土している。シベリアでは尖

頭器文化が栄え、一〇万年前から五万年前のタラハイやイギチェイ遺跡などからは、両面・片面加工の尖頭器を主体に片面礫器や石刃などが出土している。

四　新人の文化

旧人から新人へ　旧人から新人（サピエンス）への進化は四万年前から三万五、〇〇〇年前である。新人は現代人の直系の祖先である。

三万五、〇〇〇年前以降の北アジアの石器文化は細石刃文化に代表される。二万八、〇〇〇年前の中国山西省のシャラ・オソ・ゴル遺跡からは、細石刃のほか、尖頭器、掻器、彫器などの石器が出土している。三万年前に位置づけられているシベリアのウスチ・ミリ遺跡からは、細石刃、小形舟形石器や掻器とともに、毛サイ、マンモス、野牛、ウマなどの獣骨が出土している。同じくシベリアでは二万三～四、〇〇〇年前のマルタ遺跡やプレチ遺跡から、板石と獣骨で築かれた平地式の住居構築物が発見されている。インドネシアやフィリピンなどの東南アジアでは、四万年前から三万年前以降になると剝片石器製作技術が進み、両面・片面加工石器・尖頭器などの石器が主体をしめている。

一万二～三、〇〇〇年前になると地球の気温が温暖化し、狩猟、植物採集の経済から、河川や沿海への進出、弓矢を使った狩り、石斧による木材切り出しとその加工活動も盛んになり、文化の進歩もぐんと早まってきた。

第二項　日本の旧石器文化

一　大陸から陸橋を渡って

大陸とつながっていた日本列島　人類の始まりは、地球の歴史でいう「第四紀」の時代と重なっている。この第四紀は、洪積世と沖積世に分かれ、その区分は約一万年前である。洪積世の時代は六回もの氷期があったといわれている。氷期には地球全体の気温が低くなり、平地でも万年雪がしだいに大きな氷塊に成長し、やがては、大陸氷河や氷床になる。気温が比較的高い地方でも山の高い所では山岳氷河になる。となると地球全体の氷河の量は相当なものになり、そのため世界の海水面は現在より大きく下がっていた。氷河期といっても、氷河が大規模に発達する氷期と比較的暖かい間氷期とがあるので、氷期と間氷期とが代わる代わるやってくると、海水面は一〇〇㍍以上も上がったり下がったりしたと思われる。日本列島の場合は、大陸とつながったり切れたりしていたことになる。大陸とつながっていたのは、一〇数万年前、六～五万年前、三～二万年前と推測されるが、大陸とつながっていた時期「陸橋」を渡って、動物や人類は自由に行き来していたであろう。

最後の「ウルム氷期」では海水面が一〇〇から一四〇㍍下がっていたと推定されている。大陸と樺太間のタタール海峡の最大水深は二〇㍍、樺太と北海道間で五〇㍍、津軽海峡で一四〇㍍であるからウルム期は陸続きであったといえる。朝鮮海峡は最深部で一六〇㍍あるが、氷が張っている時期は渡れる「陸橋」であったと考えられよう。この陸橋が当時の新人（ホモ・サピエンス）や哺乳動物の日本列島への移動を可能にしたといえる。

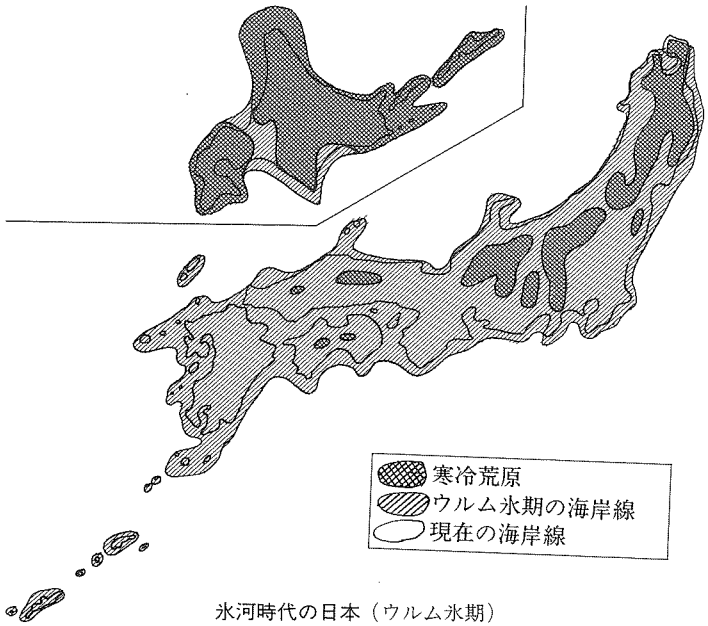
二　自然と人間

日本列島の旧石器人　ウルム氷期に日本列島の平地が氷河や氷床でおおわれていたという確証はないが、気候はかなり寒冷化していただろう。日本列島で旧石器時代人がさかんに生活の跡を残しているのは三万年前以降である。そのなかで二万年から一万八、〇〇〇年前の氷期最盛期には、日本列島の気温は年平均七度から八度も低かったと推測されている。地球上では現在の三倍の陸地が氷河でおおわれ、山岳地帯の雪線

は六〇〇～一、二〇〇㍍低下していたと考えられるからである。今でいえば海抜一、五〇〇㍍を越える高原の冷涼でしかも乾燥した気候に似ている。その景観は、針葉樹の疎林や落葉樹の低木林が所々にみえる一面の草原で、そこをナウマン象、野牛、オオツノジカなどが行き来していたと想像される。北海道・東北・本州陸部の高原地帯はツンドラに覆われ、比較的暖かい西日本でも、モミやツガなどの針葉樹を混じえる冷温帯落葉樹林が広がる状況であったろう。

当然にこの自然環境と旧石器文化との間には強い関連が考えられる。ウルム氷期最盛期の石器群をみると北方型と南方型に分けられるが、これは生業が異っていたためと思われる。北方型文化圏にはエンド・スクレーパー（掻器）が多く存在するのに比べ、瀬戸内・九州の温暖地にはそれがとても少なく多様な石器が点在する。これは、寒冷地では大型獣をも対象とした狩猟生活がさかんであり、温暖地では採集生活が重要な役割を果たしていた証明だと考えられる。

参考　『石器時代の世界』（藤本強著・一九八〇年）



氷河時代の日本（ウルム氷期）

三　旧石器人の集団社会

上場の旧石器人集団

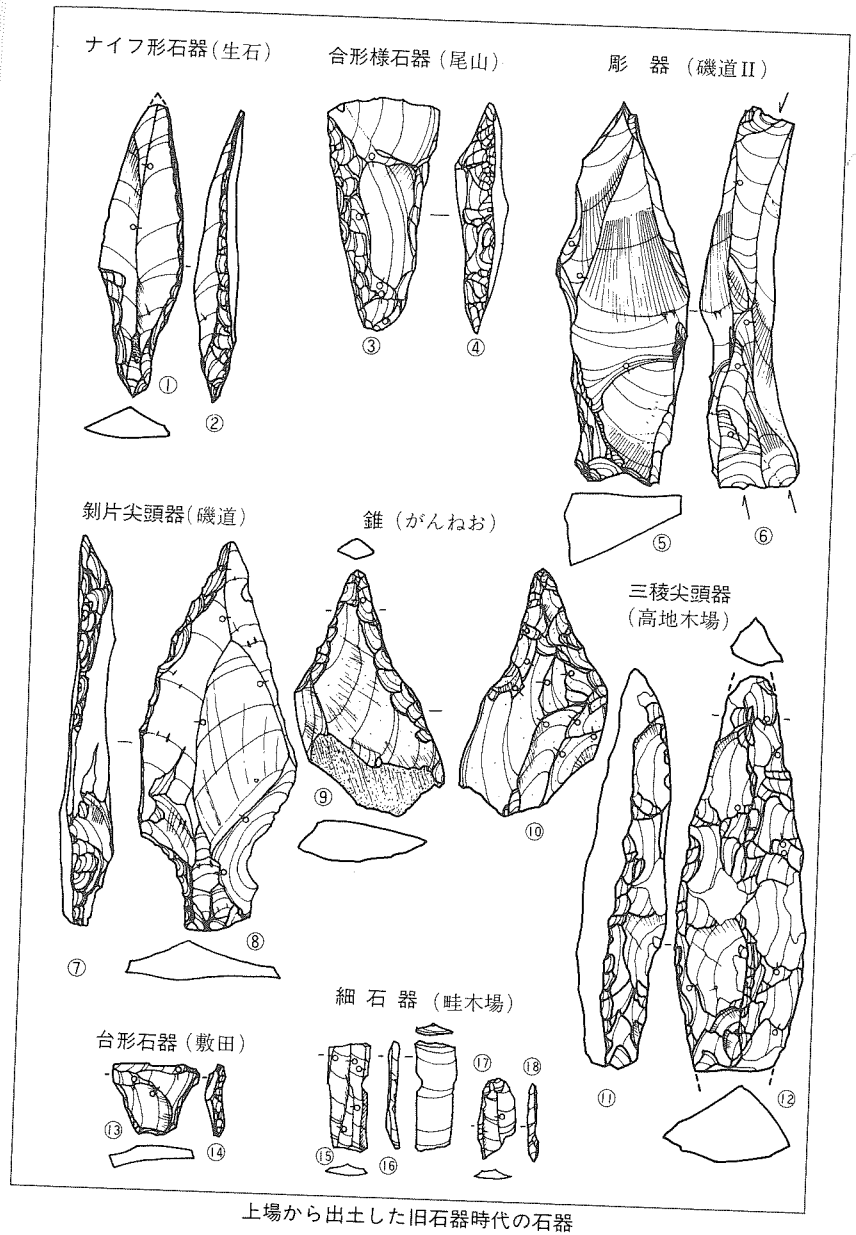
旧石器時代の人たちの集団は、一定の地域内を規則的に移動していたと推定されている。その集団は血縁関係の近い四〇から五〇人ほどで構成され、季節によっては分散する場合もあったのでないかと思われる。上場地域にある数多くの旧石器時代の遺跡は、この地縁集団の生活の跡である。この地縁集団を西北九州でみると、上場地域のほかに、平戸・松浦市周辺、西彼杵周辺、大村周辺、長崎周辺、島原周辺に存在していたことが遺跡分布の状態から推定されている。この六つの地縁集団は互いに婚姻関係などで結ばれた友好的な交流をもち、西九州核地帯を形成していたと思われる。九州では西九州核地帯のほかに、福岡地方、東九州地方、熊本平野、出水地方、鹿児島周辺、宮崎平野に核地帯が知られている。地縁集団の人口を五〇人とすると核地帯の人口は三〇〇人、九州全域では二、〇〇〇人と推測される。当時海水面が低下していたことを考えれば、その一・五倍の三、〇〇〇人になる。日本列島全域に八～十の地域社会が存在すると仮定して、当時の人口は二万五、〇〇〇人前後と想定されている。この推定人口は旧石器時代後期の一万五、〇〇〇年前から一万三、〇〇〇年前のものであるが、この時期は、もっとも寒冷な気候を過ぎた自然環境の中で人間集団の生活がその地域に固定化しはじめ、地域独自の文化が次第に顕著になっていった時期であった。

参考　『西南日本における旧石器時代』（萩原博文著）

四　旧石器時代の上場

上場は旧石器時代の遺跡の宝庫

上場台地と称され、玄界灘に突き出した東松浦半島は、日本列島の中で大陸にもっとも近い地理的有利さを持ち、大陸文化渡来の門戸として早くから開けてきたところである。旧石器時代後期の氷期極大期を例にあげると、朝鮮半島から対馬、壱岐、馬渡島、加唐島と上場をつなぐ



上場から出土した旧石器時代の石器

陸橋は、旧石器南方型文化を橋渡ししている。上場の遺跡から多く出土しているナイフ型石器は南方型文化といわれ、西九州から関東まで広く分布しているが、その文化の解明に上場は重要な所であるといえる。

上場地域の旧石器時代の遺跡は今までに二二二カ所で確認されている。行政区別にみると玄海町で二六カ所、唐津市六四カ所、鎮西町二〇カ所、呼子町四カ所、肥前町一〇六カ所、北波多村二カ所と、上場全域にわたって分布している。この遺跡の高い分布度は、食料採集経済中心の旧石器人にとって、上場が狩猟や植物採集に好条件の地であったことを示している。

氷期で海水面が下がっていた当時の環境を復元してみると、上場台地は現在より海抜高度が最高時で一四〇メートルほど高く、海岸線までの距離ははるかに遠く、外津、仮屋、新田でさえ山の中腹に位置していたであろう。一帯は針葉樹と広葉樹の混交林で五葉松やコナラなどが茂り、ナウマン象や野牛、ニホンシカその他の小動物が生息していたと推測される。年の平均気温が六～七度低かったとすると、当時の上場の気候は、今の東北地方の気候と似たものであったろう。

第三項　旧石器が発見されるまで

一　天から降ってきた矢の根石

大和王朝が石器発見の報告で安全祈願

考古学遺物の最古の記録として、奈良時代の『常陸風土記』がある。この那賀郡の条に、「大櫛之岡」における貝塚の堆積のこと（大串貝塚）と、巨人によって食べられた貝であるということが記されている。平安時代の記録として、『続日本後紀』（八六九）や『日本三代

実録』（九〇一）の歴史書に石鏃のことがある。

承和六年（八三九）秋のはじめ、今の山形県の西の地方でひどい雷雨があった。雨があがって海岸に出てみると、石の矢じりややり先がたくさんちらばっていた。この報告を受けた朝廷は、不慮の災害が起こらないようにと願い、寺や神社で無事を祈らせたということが記されている。この矢の根石（石鏃のこと）が天から降ってくるという話を地方の人々は江戸時代になっても信じていた。

遺物を天工物ではなく人工物として考え始めたのは江戸時代である。津軽藩の『永録日記』には、元和九年（一六二三）の記事に、「……亀岡と申す可き由。此所より奇代の瀬戸物掘り出し候也。其形皆々かめの形にて御座候。大小御座候へ共、皆水を入れるかめにて御座候。昔より多く出でる所也。……其名を取りて亀ヶ岡と申し候也……」と青森県西津軽郡木造町にある亀ヶ岡から土器が出土したことを記している。これが今の亀ヶ岡式土器である。

新井白石は、『白石手簡』（一七九〇）で石器を人工物と論じた最初の人である。木内石亭は石鏃の形式分類や打製石斧と磨製石斧の区別もし、石鏃は人工物であるという考えを確立した。

二　科学的研究のスタート

日本の考古学の始まり

明治になって、縄文文化の研究とその文化をつくった人間の研究（人種論）が始まった。ドイツ人のヘンリー・シーボルト、イギリス人のジョン・ミルン、アメリカ人のエドワード・モースらから西洋の新しい学問と方法が導入された。なかでもエドワード・モースは明治十年（一八七七）大森貝塚を発見。日本考古学の科学的研究のスタートになった。明治十九年には、白井光太郎により「縄紋土器」の名称が付けられた。また明治十七年東京の本郷弥生町で発見された土器は、大森貝塚の土器とは類を異にするという

認識で、同二十九年、蒔田鎗次郎は「弥生式土器」と呼んだ。

三　赤土の中から発見された石器

昭和二十年以後、各地に若い研究者が輩出し、編年研究を母体とした縄文文化の復元の研究が各地域で行われるようになった。登呂遺跡の発掘は、弥生文化の農村集落の全容を明らかにし、考古学上の発展に寄与しただけでなく、敗戦ショックの日本国民に、「二千年の歴史をもつわが国の文化」は多大の感銘と勇気を与え、考古学を国民のものに近づけていった。

弥生式土器発掘地（東京都文京区弥生町）

行商の青年が旧石器発見

いっぽう、日本の歴史のはじまりは縄文時代であることが常識とされ、縄文の起源の追究はさかんであったが、それ以前の旧石器文化の存在はつよく否定されていた。氷河時代で、しかも火山活動の活発な自然のなかでは、人間も動物も生きることは不可能と考えられてきていたのである。

昭和二十四年（一九四九）、相沢忠洋青年は行商で、赤城山麓の村々を訪れるかたわら遺跡を踏査するうちに、群馬県新田郡笠懸村阿佐見岩宿の赤土（関東ローム）のなかから旧石器を発見した。この岩宿石器文化の発見は、日本列島において、人間居住の歴史がいちやく万をもって数える古い時代にさかのぼったというだけでなく、縄文時代をふくめて、日本原始時代の歴史の流れを全人類史のなかで、歴史の一つとしてとらえる視点を与えたことに意義があった。フランスのブーシェル・ド・ペルトは、一八三五年（天保六）ころからソンム川の河岸段丘の洪積層に石器を求めて研究し旧石器時代研究の扉を開いたが、岩宿の発見はそれから百年後のことであった。

旧石器文化研究が全国各地で展開されるなかで、ここ松浦地方でも昭和二十五年三月、鏡山山頂で細石刃が発見され、間もなく唐津市東山の楠谷から船底形石器、佐志松尾からナイフ形石器が発見された。その後も相ついで数多くの遺跡が確認されて、「遺跡の中に上場がある」とまでいわれるようになった。

参考　『先土器文化の構造』（戸沢充則）

第四項　原日本人の遺跡

日本の旧石器時代の遺跡は約三、〇〇〇カ所といわれている。しかしこの大部分は後期旧石器時代の遺跡であり、中期旧石器時代の旧人の遺跡は現在一〇カ所くらいと推定されている。

日本列島最古の石器

日本列島最古の文化は、現在のところ、宮城県の北西部にあると注目されている。同県鳴瀬川上流の大和町中峰遺跡において、二一～一四万年前の石器群と、三六万年前の石器群が発見されているが、三六万年前の層からは小型剝片石器と大型角礫製の礫石器が出土している。これらの石器は北京原人などの骨が見つかった中国周口店のものに類似しているという。もしこれが事実なら、アジア大陸の中緯度地域の原人と同じ文化をもち、大陸から朝鮮半島経由で来た原人の存在を予測させるものであろう。

また同県古川市の馬場壇遺跡からは、七万から五万年前の石器群と、一五万年前の石器群が発掘されている。一五万年前の敲石一点と剝片石器十四点のいずれからも、ナウマン象の脂肪組成と九五％の類似性を示す動物性脂肪分が残存脂肪分析法で検出されている。

参考　『日本人誕生　日本人の起源とその形成』（埴原和郎・一九八六年）　◆『日本人誕生』「日本人と文化のルーツをアジアに求めて」（加藤晋平・一九八六年）　◆John Waechter「Man before History」

第五項　上場台地の主な遺跡

一　玄海町内の主な遺跡

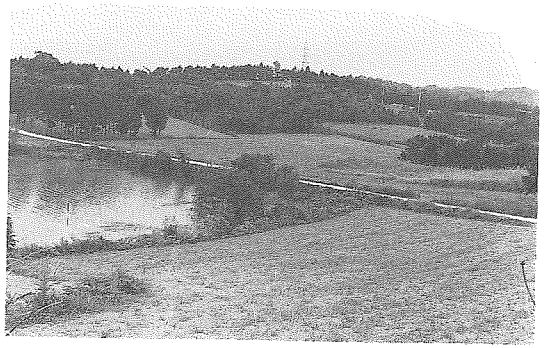
(1)　日の出松遺跡群（玄海町大字有浦上字日の出松）

唐津市と境界を接する上場台地のほぼ中央に位置し、標高一五〇㍍の丘陵上に日の出松がある。遺跡は日の出松溜周辺の南向きの緩斜面一帯に分布し、ナイフ形石器、台形様石器、石錐、細石核などの石器が発見されている。すでに昭和三十年代のはじめから全国に紹介され、旧石器時代のナイフ形石器を伴う時期の石器の組み合わせについての研究で注目された遺跡の一つである。出土遺物はその他に、台形石器、細石刃、石刃などもある。

(2)　普恩寺遺跡群　敷田遺跡（玄海町大字普恩寺字上の口・大字平尾字敷田）

上場台地の西北端に突出する値賀崎の付け根部一帯に普恩寺遺跡群は広がる。標高七〇から九〇㍍の波状的な段丘上に、遺物散布地が密集し、甲頭、平尾から浜野浦周辺まで確認されている。

県教委により昭和五十四年六月から七月にかけて発掘調査が行われ、旧



日の出松旧石器時代遺跡

石器時代終末期のナイフ形石器、台形石器、台形様石器、細石刃、彫器、石刃などの遺物が出土した。

(3) 花ノ木遺跡群（玄海町大字石田字花ノ木）

花ノ木集落一帯のなだらかなスロープの丘陵上の開墾地から旧石器時代の遺物が数多く採集されている。遺物の散布地は花ノ木から前田にかけて数カ所ある。

これまで、ナイフ形石器、台形石器、彫器、掻器、削器、石刃、細石刃、Uフレなどが見つかっている。

(4) 牟田・畦木場遺跡（玄海町大字小加倉字牟田、鎮西町石室字畦木場）

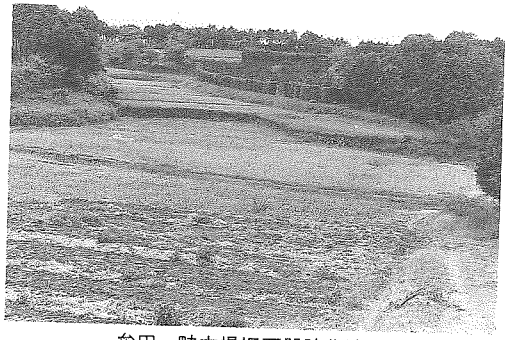
玄海町と鎮西町が接する牟田、畦木場周辺一帯の標高一四〇㍍の低丘陵上に遺跡はある。とくに西に張り出した丘陵の南緩斜面に遺物は多く散布している。丘陵の南側低地には水田が開かれ、湧水地点も近い。遺物として、ナイフ形石器、掻器、剥片尖頭器、細石刃、石核、剥片などが出土した。

二 周辺のおもな遺跡

(1) 原遺跡（鎮西町大字高野字原）

遺跡は鎮西町原と唐津市猿口に広がって所在し、三方を水田で囲まれ、浦川ぞいの西にのびる舌状丘陵の南緩斜面上にある。

昭和三十八年八月、明治大学によって、旧石器時代終末期における石器の共存関係を解明する目的で発掘調査



牟田・畦木場旧石器時代遺跡

が実施された。その結果、ナイフ形石器と細石刃文化が重なる時期があることが確認された。

遺物は、ナイフ形石器、細石刃、細石核のほか、台形石器、台形用石器、剥片尖頭器などが出土した。

(2) 磯道遺跡（肥前町大字入野字磯道）

上場台地から西に張り出した入野半島の根元部に磯道遺跡はある。東西に走る丘陵の鞍部（標高一三〇㍍）の南緩斜面に二五㍍×四〇㍍の範囲で遺跡は広がっている。

磯道遺跡は昭和五十五年八月、町教育委員会により発掘調査が行われた。その結果、一万四、〇〇〇年ほど前の旧石器時代晩期の集落跡であることが判明した。遺跡からは三千五百点余りの出土遺物が集中しているブロックとよばれる石器製作跡や住居との関連をもつと思われる配石遺構が検出された。遺物包含層は二層確認され、ナイフ形石器、台形石器、彫器、掻器、三稜尖頭器、細石刃、石刃、敲石などの石器が出土した。調理用の石器と推定される敲石は全国で六個発見されているが、そのうちの一個がここから出土した。

石器を作る黒曜石の原石は、長崎県松浦市の牟田免周辺から手に入れており、磯道人の生活や文化を支える地縁集団の範囲は西北九州に広がりをもっていたことが推定された。

(3) 生石遺跡（肥前町大字大浦字生石）

生石遺跡は上場台地の南西端、標高一九〇㍍に位置し、南側は台地が急斜して伊万里湾に下る場所にある。遺跡は東にのびる舌状丘陵上の鞍部に三〇㍍×二〇㍍の範囲で広がっている。

昭和五十二年に県教委によって発掘調査が行われ、旧石器時代の四層の遺物包含層と配石遺構が検出された。配石遺構は三㍍×四㍍のU字型をなし、中央部にくぼみをもつ環状石組みであった。

遺物は、ナイフ形石器、台形石器、掻器、削器、彫器、剥片尖頭器、石刃、細石刃などの石器と、石核や細石

核、剝片・砕片など千八百点余りが出土した。

この発掘調査で、上場における旧石器時代終わりごろのナイフ型石器文化から細石刃文化へ移行する時期のようすが明らかになった。

第四節　縄文時代の人々

第一項　新しい自然環境と縄文人

氷河時代も終わりに近づくと、周囲の自然環境は大きく変化していった。樹林帯の変化はそれに依存して生息する動物をも大きく変えた。年間の気温が高くなるだけでなく、四季の変化も顕著になり、降雨の様子も変わっていった。海水面の上昇による変化も大きく、陸続きだった日本列島は大陸から分離して島国となった。低地の森林や草原には海水が侵入してきた。このような自然環境の変化は、特に大型動物にとっては活動の場や食糧の減少につながり、そのために急速に数を減らしたり、絶滅へと向かったものも多かった。

気温の上昇化による降水量の増加は河川の発達を促し、湾や入り江に沖積地をつくり、干潟や砂浜の堆積も進んでいった。そのため河川や沿岸に住む動植物相も当然変化していった。

このような自然環境の大変化は、長い目でみれば動植物にとっては生存・繁栄により適した方向に向いていた

のだった。人類にとっても、気候・地理・動植物相などの諸条件から受ける影響は大きく、苦難の幕開けであったろう。しかし人類は、自然に順応するだけの動物ではなく、自然の節理を知り、自然に能動的な働きかけをするまでに成長していた。すでに道具を工夫し、作ることを身につけていた人類は、この逆境のなかで、より優れた道具を創作し、新たな文化を創造して歴史を前進させてきたのである。

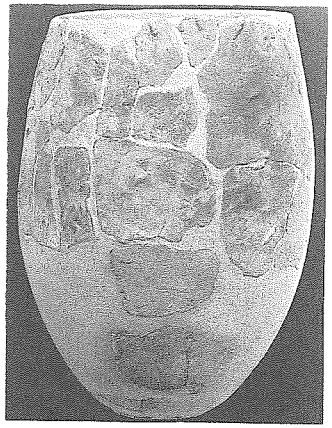
参考　『原始古代人の生活』「日本考古学を考える(2)」（間壁葭子・一九七九年）

一　土器と弓矢の二大創造

土器の発明

どこにでもあり、しかも手軽に手に入れることのできる粘土に、意のままに成型し、それに熱を加えてできるのが土器である。イギリスのチャイルド博士は「土器の発明は人類が化学的変化を応用した最初の事件である」と述べている。土器は運搬、貯蔵、煮炊きという利用法をもち、人類の生活・文化を大きく向上させた。運搬や貯蔵は他の物でも代用できるが、煮炊きは他の物と簡単に取り替えはできない。しかも器としての成型もしやすく、磁器とちがって通気性に富んでいるので、煮炊き用としては最適のものである。また、土器を用いて煮炊き技術を獲得したことは、調理法もふえて、より多くの食料資源の開発に道を開いた役割も大きかった。佐世保市泉福寺洞穴で出土した世界でも最古の部類にはいる豆粒文土器の内面に炭化物が付着していたが、これは土器の出現当時から煮炊きの用途をもっていたことを明らかにしたものだった。

粘土はどこでも手にはいりやすく、土器は製作しやすく軽労働



日本最古の豆粒文土器

できること、こわれやすいが補充がきくこと、一段階進歩した製作技術は期間的に長く引き継がれるし地域的な伝播もみせること、生活や文化の基本である「食」と深く結びついていることなどから、地方文化の独自性を反映しており、その時期の人間社会を解明する上で、土器はその時期や時代を代表するものとして取り扱われている。

弓矢の発明　より遠くにいる獣を捕りたい、空を飛ぶ鳥を確実にしとめたい、すばやく逃げる小動物を捕らえたいという人間の夢は、弓矢の出現で大きく前進した。同時に、自然のなかの一員として生きる人間の、自然との調和を保つ知恵でもあった。狩猟では、もろもろのワナより、投げ石より、槍よりも弓矢は確かに威力を発揮できた。矢につける石鏃（矢じり）が、多くの石器のなかでも改善が加えられた高い技術で、しかも大量に作られていることは、利器のなかでもその位置が重要であったことを示している。縄文文化時代が別名石器文化時代といわれ、一万年もの長い間続いたが、弓矢の出現は縄文文化を支えるものであったといえよう。

二　縄文文化の発展

縄文式文化時代を略して縄文時代とよんでいる。採集経済を基盤とし、自然に絶対的に依存した時代である。そのために縄文文化は多分に呪術思想を背景にしていたことが土偶や石造物にうかがわれる。縄文時代は明治年間には「貝塚時代」と呼び、世界史の視点から「石器時代」あるいは「新石器時代」とも呼んでいる。

縄文とは　縄文の名称は、土器の表面に施文された縄目の文様に由来するが、九州では各時期を通じて縄目文様が施された例はほとんどみられない。土器の成型や文様をつける際もロクロ製作というより、その前段階の回転台を使用していたとみられている。

縄文文化は、稲作農耕文化と金属器文化の伝来による食物栽培経済への移行で終わりを迎えるまで約一万年も

続いた。縄文式文化は、地域的変化と年代的変遷を顕著に示すが、ここでは縄文式土器の編年により、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の六区分で説明してみることにした。

参考　『縄文式文化』「日本考古学辞典」（八幡一郎・一九七八年）

第二項　縄文時代各時期の生活と文化

一　草創期の生活と文化

海進により低地の水没が進むなかで、場所によっては河川の発達に伴い沖積地の堆積が始まる時期であった。気候は縄文時代全期を通じてあまり大差なかったと推測されているが、早期には洞穴・岩陰住居がみられることから、やや寒冷な気候ではなかったのかとも考えられる。しかし集落の多くはフィールド（開地）にあり、河川の本流と支流の合流地周辺や谷の裾部にある丘陵上などで営まれていた。この立地条件は旧石器時代の終末期と似ており、人々の生活基盤が変わっていないことを示している。沖縄県那覇市の近くで発見された港川人（男性の身長一五五センチと推定）は一万八千年前の旧石器人であるが、その特徴は縄文人とよく似ており、縄文人の直接の祖先と考えられている。

洞穴・岩陰遺跡から出土する遺物から、イノシシやシカは草創期人の食物の主体だったと推定されている。

土器は深鉢型をしているものから始まり、底部は平底か丸底であった。すえた時の安定性には欠けるが、煮沸する際の熱効率からいうと合理的である。多くの土器の壁に炭化物がついていることは煮炊き用として使われた証である。

参考　『日本人の起源とその形成』「日本人誕生」（埴原和郎・一九八六年）

日本最古の土器　最古の土器は、佐世保市泉福寺洞穴の第十層から出土したものである。この土器の外壁には大豆のような粘土粒をはりつけた文様があることから豆粒文土器と名づけられ、一万二千五百年から一万五百年前のものと推定されている。その上層の第九層と七層から隆起線文土器が出土し、一万千八百年前のものと推定されている（本州では、この隆起線文土器と槍先形の有舌尖頭器が共伴している）。第六層からは爪形文土器、第五層から押圧文土器が出土している。これらの土器に旧石器時代終末期から使用されてきた細石刃が共伴している。このことから、新しい土器文化を作りだした縄文人は旧石器文化を継承しながら、日本列島で生活していたことがうかがえる。日本列島最古の土器は当時の落葉樹林帯でまず出現し、列島の温暖化にともなって北上し、やがては日本列島各地に分布するようになったと考えられている。

隆起線文土器

二　早期の生活と文化

縄文人は芸術家　縄文文化は早期に、各分野で定着化が進んでいた。その第一は弓矢の使用が増え、採集経済が確立化に向かっていたことであった。この時期の弓は、木の枝を利用した半弓とよばれる小形のもので、森林で狩りをする時、水中の魚を射るとき、あるいは近くの獲物を射る場合に適したものであった。

縄文海進によって各地の海岸地帯には溺れ谷が発達し、深く入り込んだ海岸が続いて内湾や入り江が出来てい

った。この内湾や入り江は魚貝類の生息地となり、この魚貝類は人々の重要な食糧源になった。漁具としての釣針、銛、猟（モリの一種）などがこの時期に出現した。また多くの石錘（石のおもり）が出土する遺跡のあることから、漁網の出現もこの時期ではないかと推定されている。

獣骨、魚骨や貝、石を材料にして巧みに装飾を施した首飾り、笄、腕輪などの装身具も出現している。縄文人は芸術家であるといわれるが、その起こりもこれにみることができる。

死者の埋葬　生活や文化のなかで、死者の埋葬は重要な位置をしめるが、早期に、埋葬方法の変化がみられた。洞穴住居のなかでは住居場所と埋葬の場所が明らかに区別されており、埋葬は屈葬形態で洞の奥壁よりに葬られている場合が多い。野外の貝塚遺跡からも埋葬人骨が出土しているが、いずれも屈葬であった。

土器製作技術　土器の製作技術では、円板状の粘土をはり合わせる成形法から、太い粘土ひもを環状にして積み重ねる輪積み法にと進歩していった。粘土の中に植物繊維を入れて製作する手法もあった。

かつて日本列島の縄文文化を東西に分け、西の「ドングリ文化圏」と東の「サケ・マス文化圏」説を唱えた学説もあるが、土器文化からみても西の「押型文文化」と東の「撚糸文・貝殻沈線文文化」とに分けることができる。自然環境と結びついて地域の独自文化の発展を特色とする縄文文化のはしりは、早期に現れていた。

三　前期の生活と文化

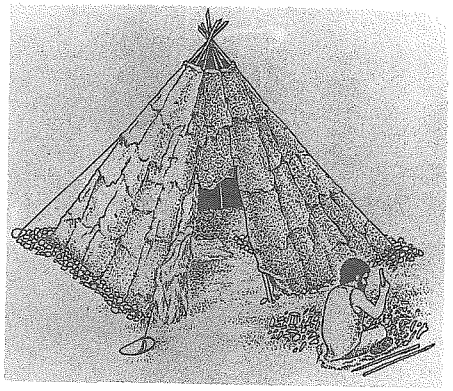
集落は早期のようにせまい台地上に立地するのは減少し、前期になると台地上の広い平地や、台地の突出部に移ってくる。一集落は数戸の単位で構成され、散村形態であったと思われる。また竪穴式住居の大型化も各地で見られる。これは食料の確保がより安定して定住生活の傾向が強くなり、集落を構成する人口の増加にも起因するためであったろう。

集落の始まり

前期にムラの形成が始まっている。三、四家族の親族でつながる単位集団が三、四親族集団の結合体として一族＝ムラが構成されていったと推定されている。一族の集団形成は早期から定着しはじめたと考えられるが、前期になって住居をU字形に並べた集落内の住居配置が確立し、共同墓地や共同祭祀跡が確認されている。このことは共同のムラが形成され、ムラの掟や個々の分担が確立していたことをうかがわせる。生産関係でも、獲物はムラの共有物であり、その余剰はムラの繁栄につながっていった。

縄文人の労働

岡山県彦崎貝塚から出土した人骨から前期人の生活の様子がわかる。三十歳前後の女性の歯は、前歯の歯冠が真中から切断されたように磨り減り、表面には粗大なきずが縦横に走っている。これは固い粗雑な食物によるものでもあるが、動物の皮をなめしたり、ものを噛み切ったりして、歯が道具の役割を果たしていたことがうかがえる。骨折しても患部はつねに動かされていたために、骨折したところが癒着しないまま治ってそこに不完全な新しい仮関節ができているのもあった。また、湿度の高い竪穴住居生活のため、関節炎にかかった人骨も多く、激しい労働のため変形性関節症が脊椎、膝、足の親指にもみられた。たくましい筋肉の発達も特徴的であるという。これらのことから、大自然の中での経済生活を一歩でも安定させるためには集落の一員として任務を果たしていた前期人の厳しい生活の一面が想像されるという。



竪穴式住居

生活の変化と土器の変化

関東地方では、早期末から住居が大型化し、煮炊き用の炉は屋外から屋内に入り、前期になると暖房も兼ねた屋内炉になった。屋内の固い床面では煮炊き用の土器が尖底だとつき立てて使用するには不安定なため、底面が平らで広くて安定する円筒形の土器に変わってきた。そのうえ、容量が大きく、胴部に強い炎があたるよう熱効率も考慮した煮沸専用の土器が作られてきた。煮沸用の深鉢形土器は、前期末に利用範囲を広げ、鉢、台付鉢、壺が作られ、一段と土器の必要度が高まっていたようだ。また土器の器面に漆と思われる樹脂塗料を塗ったものも現われた。これは酒とか塩漬けの魚肉を収納していた土器と思われ、ここにはじめて保存用の容器としての土器が出現した。

西唐津海底遺跡・朝鮮半島と交流

西九州の前期文化は、曽畑式土器（熊本県宇土市曽畑貝塚から出土した土器）に象徴される。丸底で深鉢型の土器に、平行で幾何学的な沈線文様を施したもので、西唐津の海底遺跡から出土して注目された。それは朝鮮半島南部に広がる櫛目文土器と文様がよく似ているだけでなく、胎土に滑石粉末を混入している点や器型も似ているし、伴出する磨製石斧、骨角製釣り針、銛などの漁労具も同一形態をもつからである。また韓国釜山市の東三洞貝塚出土の黒曜石は、伊万里市腰岳産のものにまちがいないとみられている。

参考　『骨からみた日本人』日本の美術No.189（鈴木尚・一九八二年）

四　中期の生活と文化

縄文土器が世界の先史土器の中でひときわ目立っているのは、口縁

曽畑式土器

部の大きな突起や波状口縁になっていることにあって、その発達が最高潮になったのが中期文化である。関東・甲信越地方を中心に大きく花開いた。

この中期土器文化隆盛の背景には、これまでより以上の食生活の安定が考えられる。沖積が進んだ海岸部では、大貝塚を出現させるほどの組織的な漁労、貝類の採取が可能となり、内陸部では植物処理技術が進み、ドングリやクリなどの堅果類をゆでて渋皮をむいたり、干しクリなどの保存食もつくられるようになった。

縄文中期の人口

中期の日本列島の人口は、総体で約二十六万人と推計され、縄文全期を通して最高であると考えられている。後期になると気候の寒冷化にともなう動植物相の異変、人口増にともなう乱獲などで、自然の均衡状態が破れたため食料事情が悪化し、人口減になったとみられている。

焼畑農業開始

八ケ岳山麓（長野県）では中期になると、大集落が密集しながらしかも石鏃が減少していることからみて、焼畑陸耕の開始があったと考えられている。その後、民俗例から「サトイモ栽培」主食論や、大量に出土する石皿や磨り石は澱粉製造用であろうというような賛成論もあっている。

伸展葬の増加

埋葬方法で、死者の両脚を伸ばして葬る伸展葬は中期になるとよくみられるようになり、以後、屈葬と共存して行われるが、時代が新しくなるほど伸展葬がふえてくる。屈葬信仰は、死者に胎児と同じ姿勢をとらせて、母なる大地に還元するためとか、遺体から死霊が遊離して人々に危害を加えないように、身体を屈して霊を閉じ込めるためだとか説かれているが、伸展葬は中期人の埋葬信仰に明らかに変化が起きた証拠とみられている。

縄文式土器

九州の阿高式土器文化

西日本の中期土器には東日本の土器のようなはなやかさは見られないが、それでも縄文時代全体を通じてみると、各々の地において前期文化を継承した文化が花開いている。

九州では阿高式土器（熊本県城南町の阿高貝塚から出土した土器）が、宮崎や大分県の東部海岸地方の船元文化（岡山県倉敷市船元貝塚から出土した土器を標式している土器文化）圏を除いた西九州一帯に広く分布している。阿高式土器は深鉢形土器を主体にし、それに浅鉢もみられ、文様は、指頭あるいは棒の先で描いたと思われる太形凹文とよばれる自由奔放な沈線文が特徴である。土器の胴部はややふくらみ安定した平底をしているが、底部には放射状や海綿状の鯨の脊椎骨の圧痕が認められるために、鯨の脊椎骨を土器製作の回転台として使用したのであろうと指摘されてもいる。

阿高文化の沿岸部の遺跡には貝塚がよく発見され、漁労活動がさかんだったことをうかがわせる。貝類と魚骨が出土するが大形魚も含まれている。漁具として石錘、骨製ヤス、エイ尾棘製ヤスに加えて鋸歯状の刃先をもつ石鏃や石鋸が出土している。磨製石斧は扁平な撥形の両刃石斧とともに扁平片刃石斧もよく発見されている。この片刃石斧は木材の加工具として漁労用の舟の作成に使用されたと推測されている。

内陸部の例では、西有田町の坂の下遺跡から、ドングリやシイの実などを収納した貯蔵穴群が発見されている。植物製の編物篭は木の実採集用と思われ、内陸部における食糧は木の実に負うところが大きかったことを示している。鯨脊椎骨の圧痕土器は山間部の阿高式土器には普遍的にみられるが、沿岸部と内陸部の強い交流があったことを物語っている。

参考　『極盛期に到達した縄文土器』「縄文式土器」（江坂輝弥・一九七五年）　◆『九州における縄文中期研究の現状』（前川威洋・一九六九年）

五　後期の生活と文化

六千年ほど前から始まった気候の冷涼化は、後期にはいって小康状態を保っていたが、後期末から晩期にかけてふたたび低下したと推測されている。これが縄文人の重要な食料源である森林植生に大きな影響を与えた。この冷涼化が山岳地帯でとくに影響を及ぼしたことを、中部山岳地帯を中心に栄えた中期文化の衰えが物語っている。また関東地方でも大貝塚群は後期中ごろから減りはじめ、晩期中ごろにはほとんど姿を消しているが、これも気温の低下と海退現象によるものであると考えられている。中期にピークに達した日本列島の人口は、この自然現象の影響を受けて減少に転じていったと思われている。

縄文人の寿命　では、縄文人の寿命はどのくらいだったであろうか。出土した人骨をもとに死亡年齢が算出される。生まれてから十五歳に達するまで六割が死亡し、三十歳になったときにはさらにその半数が減少すると推測して、男子は三十一・一歳、女子は三十一・三歳と平均年齢を出している。ちなみに、明治二十年から三十年にかけて、わが国ではじめての調査がなされた男女の年齢では、男子三十五歳、女子は三十七歳となっているが、縄文以降の日本人の平均寿命はあまり延びていないことがわかる。

製塩の始まり　海水を煮立てて作る製塩は後期に関東地方で始まっている。土器に海水を入れ煮沸して塩をとる土器製塩法だが、土器は深鉢形で文様はなく、熱効率を高めるため薄手の粗製鉢である。同じ特徴をもつ土器が海岸線を遠く離れた内陸部まで分布しているが、これは塩を入れて運ばれたものであろう。塩や海産物を媒介とした海岸部と内陸部の密接なつながりは、近年まで「塩の道」として残っていた。しかしなぜか

西日本では弥生中期、西九州では古墳時代と塩の初現は遅れている。

縄文人の信仰　縄文人は、土偶、石棒、土版などの呪術的、信仰的遺物を残しているが、中期から後期・晩期になるにつれてその遺物が増えることはそれだけ呪術体系が複雑化したことを示している。この複雑化した呪術体系は縄文人の生活すべてを律するものであったと思われる。環状列石などの配石遺構は土偶の祭りも行ったと想定され、祭りは共同体の結束を強める役割をはたし、土偶を多数保有する集落ほどより広い地域において中心的存在を示していると指摘されている。

土器の変化　中期に栄えた立体的で繁雑な土器の装飾は、関東中部地方から影をひそめ、器形も文様も単純化し、画一的で簡素なものになった。しかしこれは人間社会の衰退からきたものでなく、つぎの新しい時代への発展の胎動といわれている。

照葉樹林文化の伝来　東南アジア北部の山地から、中国の雲南・江南地方、朝鮮半島南部から西日本にいたる暖温帯に、カシ、シイ、タブ、クスやツバキなどを主体とする森林が広がっている。この照葉樹林帯には過去から現在にいたるまで数多くの民族が居住してきたが、その民族文化のなかには民族の差異はあっても、数多くの共通する文化要素が存在している。それを「照葉樹林文化」と名づけられているがその共通する文化要素として、野性のイモ類やドングリなどの堅果類を砕いて水にさらしてアク抜きする方法、茶の葉を加工して飲用する慣行、繭を採取して絹をつくる技術、ウルシなどの樹液を用いて漆器をつくる方法、麹を用いて酒を醸造する方法、柑橘類やシソ、エゴマ類の栽培などを挙げている。これらのなかで堅果類をアク抜きする技法、ウルシの技術、シソやエゴマの栽培などはすでに縄文前期の早い段階に日本にきていたとみられている。

照葉樹林文化の担い手は焼畑農耕民であり、焼畑農耕に基礎をおく生活であった。焼畑をめぐる慣行や習俗は

一般的に、水田耕作農耕の進展にともなってその特色を失っていく。すなわち、焼畑農耕は水田稲作に先行する農耕であった。

西九州では後期後半になると、磨消縄文土器から黒色磨研土器に変わること。石鍬や穂摘み用と思われる打製石器が出土すること。遺跡の景観などから考えて、このころ朝鮮半島からアズキ、アワ、ヒエ、キビなどの雑穀がもたらされ、それが農耕文化の起源になったのではないかと推定されている。

参考　『日本の美術』No.191「環状のムラ」（金子裕之・一九八二年）　◆「倭人と南からきた文化」『日本人誕生』（佐々木高明）　◆『新版考古学講座第三巻』「縄文後期文化―九州1」（前川威洋・一九六五年）

六　晩期の生活と文化

晩期の集落は後期からひきつづいて、丘陵台地上・谷頭部に存在していた。しかし稲作の展開とともに水田耕作に適した沖積低地に接する低丘陵や段丘上に移っていった。一集落の戸数は十戸内外と推定されているが、経済力の差によって増減があったろう。住居跡は円形、方形の両方がみられるが、居住面積からみて四、五人から五、六人の家族構成と推定されている。

中期後半からの冷涼化現象にともなう食料源の変化は晩期に入っても続いた。とくに中部・関東・東海地方では石鏃が爆発的に増加。また石鏃の大形化、凸基鏃（石鏃の基部が突出しているもの）の普及や石槍の復活などは狩猟活動が活発になったことを示している。貝塚では貝類の減少と獣角の増加にもそれが表われている。

石鏃（敷田遺跡出土＝玄海町大字平尾）

土器には精製と粗製がみられるが、木製品にも精製と粗製品がある。白木弓のほかに樺を幾重にも巻いた上に黒と赤の漆で彩った弓があるし、篦や櫂に彫刻や装飾をもつ精製品もあった。飾る世界は個人に属し、無文の世界は社会的、共同的規制によるものと想定されている。世界的には木器の製作は男、土器の製作は女が分担した社会が多いといわれているが、精製土器は男の製作と想定されてもいる。

装身具も発達している。髪針・笄・櫛などの髪飾り、精巧な耳飾り、垂玉・勾玉などの首飾りや耳飾り、彫刻を施した腰飾りにいたるまで獣や魚の骨、角、歯、土製や石製、玉類、貝類を見事に活用し、加工したものが発達した。

参考　『日本の考古学』「縄文時代の生活と社会」（麻生優・一九六五年）　◆『日本の美術4』縄文時代Ⅲ（金子裕之・一九八二年）　◆『日本民族形成』（藤間生大・一九五一年）

第三項　縄文文化の二つの方向

縄文文化は終末に入るころ、二つの方向にはっきり分かれていった。いっぽうは従来の文化遺産の集大成ともいえる亀ヶ岡文化（青森県西津軽郡木造町亀ヶ岡遺跡）に代表される文化で、いまいっぽうは簡素化への道を歩みはじめた西日本縄文文化であった。

亀ヶ岡文化の道すじは狩猟、漁労、採集の生産体制のなかに依然として留まるものであった。一見華麗にみえる文化の様相だが、「もはや将来においては発展する内在力を失った」ものであった。

これにたいして西日本文化にみられる簡素化現象は、部分的ではあるが新しく「原始農業」を取り入れることから、生活をより積極的に豊かにするために起こった努力と創意の表れであり、見た目には貧弱なようでも、それは「将来に向かって発展する力を内在しているもの」であった。

日本の縄文文化がこの二つの方向を示すようになってきたとき、決定的に作用したのが、海外からの水稲農耕をともなった弥生文化の波及であり、新しい方向を探りつつあった西日本縄文人たちは、積極的にこれを受け入れ、新しい時代への展開をみせたのであった。

水稲農耕の渡来　現在にいたる二千年以上もの長い間、米は日本人の食料として主食の地位をしめてきただけでなく、また経済、文化、政治の基盤にもなっていた。

唐津市菜畑遺跡で、晩期後半の山ノ寺文化期の畦畔や用水路をともなう水田跡と炭化米、それに水稲農耕文化の朝鮮半島系の諸遺物が発見されたが、この意義は大きい。列島最古の水稲農耕が確認され、日本列島への伝来のルートが朝鮮半島から渡ってきたことがほぼ確定的になったからである。この水稲農耕は短期間のうちに日本列島を縦断して、弥生時代には青森まで達していたのだった。

第四項　上場地域のおもな遺跡

上場台地上や周辺沿岸部には縄文時代の遺跡が多い。その多くは旧石器時代晩期からの複合遺跡であり、移住

生活の時代には上場地方は好適な生活の場であったことを物語っている。遺跡・遺物分布地を市町村別にみると、玄海町七二カ所、肥前町一六四カ所、鎮西町一一五カ所、呼子町三五カ所、唐津市九六カ所、北波多村二七カ所、合計五〇九カ所が確認されている。当時の集落跡の多くは現在開墾されて畑地となっているために、今でも畑から多くの遺物を採集することができる。発見された石器類からみると、断続的にせよ各時期に、そこに縄文人が居を構えていたということがわかる。

一　玄海町内のおもな遺跡

町内の縄文時代遺跡は、今村・大橋、普恩寺・平尾、仮立、石田・花ノ木、小加倉、日の出松、大鳥・牧ノ地地区にその群落がみられる。いずれもなだらかな丘陵上の南向き緩斜面に多い。海岸遺跡は浜野浦、高岩、三島に所在するが、特に漁労具である銛の石鋸を出土した浜野浦は大陸文化との関連で注目される。

(1) 大橋遺跡（玄海町大字今村字大橋）

周辺にはなだらかなスロープの台地が広がり、雉ノ尾、御獄、塩仮田、釜蓋、櫨山、大橋南などの遺跡が点在する。大橋遺跡は台地の丘陵上から南向き緩斜面にかけて広がり、南側低地に水田が開けている。昭和五十六年九月に町教育委員会により発掘調査が行われ、縄文時代晩期の集落跡であることが判明した。住居跡は一辺五メートルの方形の竪穴住居一棟が見つかり大小の土壙内からは、夜臼式（福岡県新宮町の夜臼遺跡から出土の縄文式後期に属する土器形式）の甕、壺、浅鉢などの土器と、石鏃、石斧などが出土し

大橋遺跡（発掘風景）

た。また、南部分は石器製作場とも思われ、石鏃・掻器とともに多くの剝片・砕片が出土した。

(2) 普恩寺遺跡群（玄海町大字普恩寺、平尾）

甲頭、塔ノ谷、上ノ口、敷田、平尾などに遺跡が密集している。古くから旧石器時代の遺物とともに、石鏃など縄文時代の石器も採集されていた。昭和五十四年の発掘調査で、敷田、上ノ口遺跡では縄文時代の土壙、柱穴、石器製作跡が検出され、石鏃、尖頭器、掻器などが出土した。

(3) 牟田遺跡（玄海町大字小加倉字牟田）

旧石器時代の畦木場遺跡に隣接する。石器、掻器、剝片と土器片が見つかっている。

(4) 花ノ木遺跡（玄海町大字石田字花ノ木）

大字石田花ノ木から、大谷、入川内、栄地区に広がって遺跡は点在する。石鏃、石斧、石核、剝片などが多く採集されている。

(5) 日の出松遺跡（玄海町大字有浦上字日の出松）

日の出松溜周辺に点在する遺跡から、石鏃、石斧、石匙などの石器が採集されている。

(6) 大鳥遺跡（玄海町大字牟形字大鳥）

大鳥、野高山西麓、牧ノ地にわたって遺物散布地が多い。石鏃、剝片鏃、剝片などが採集されている。

二　上場台地、周辺のおもな遺跡

(1) 牟田辻遺跡〈早期・前期〉（唐津市枝去木字矢倉）

有浦川上流の分水界近くの牟田辻にある遺跡で早くから注目されていた。昭和五十三年に県教育委員会により発掘調査され、早期の集落跡であることが確認されて、戸外炉と思われる石組み炉が検出された。

出土遺物は、楕円、山形の押形文土器、条痕、撚糸文土器と、石鏃、掻器、尖頭器、砥石、磨石、敲石、石皿などの石器が多数あった。

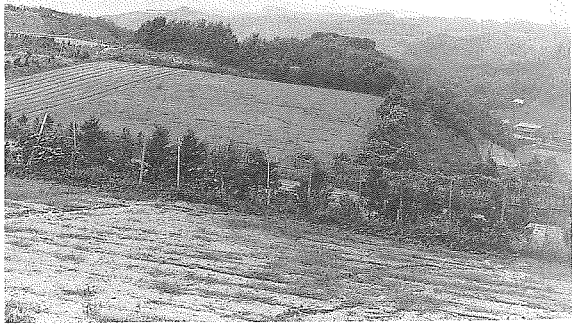
(2) 西唐津海底遺跡〈早期・前期・中期〉（唐津市西唐津築港）

昭和二十三年、唐津港築港の際に発見された遺跡である。特に前期前半の曽畑式土器（熊本県宇土市曽畑貝塚出土した土器）を出土する標準遺跡として注目されてきた。土器は早期の爪形文、隆起線文、前期の曽畑式土器、中期の阿高式土器など、石器では石鏃、石槍、石匙、石斧など、骨角器では骨針、骨製尖頭器などが検出された。その他食料源としての動物や貝類の遺存体も多かった。

(3) 百田洞穴遺跡〈早期・前期・中期・晩期〉（肥前町瓜ケ坂字百田）

伊万里湾に臨む標高四十二㍍の上場台地の傾斜面の砂岩質の洞穴に所在する。昭和五十二年と五十三年に県立博物館と町教委によって発掘調査が行われ、四層の遺物包含層が検出された。縄文各期の土器や石器類の遺物が出土した。遺物の出土量は比較的に少ないため、この洞穴は住居として定住したところではなく、狩猟や漁労のさいの一時的なキャンプとして利用されたものと思われている。

すぐ西側に玄蕃ケ岩洞穴遺跡もあり、黒曜石剝片が出土している。



牟田辻遺跡

(4)
赤松海岸遺跡〈前期・中期〉（鎮西町大字石室字赤松）

潟川が名護屋湾に流れ込む河口左岸の礫浜海岸にある遺跡。昭和四十二年、発掘調査が行われ縄文時代の遺物包含層が確認された。土器は胎土に滑石粉末を多く含んだ曽畑式土器や阿高式土器が出土し、石器では打製・磨製石斧、石鏃、石槍が多量に出土した。また石錘も多く出土することから漁労の進歩による漁網の存在も考えられている。

(5)
小川島貝塚遺跡〈縄文前・中・後・晩期、弥生前・中・後期、古墳時代〉（呼子町小川島二八〇番地）

小川島南側に開ける湾を臨む砂丘上に貝塚遺跡がある。昭和五十年に発掘調査が行われ、縄文前期から弥生、古墳時代各期にかけて、断続的に生活が営まれていたことが明らかになった。各時期の土器とともに、石鏃、石斧、掻器、敲石、磨石、砥石などの狩猟用、加工用石器とともに、漁具の石錘も出土した。骨角器も多く、鯨骨製の刺突具、鹿骨製鏃、鹿骨製ヤス、鯨骨製アワビおこし、貝製鏃、貝輪なども出土した。食料源の貝は、アワビ、サザエ、ウニなど海産貝で七、八種、動物類はイノシシ、シカ、ニホンザル、ウミガメなど六種、魚類はサメ、マダイ、スズキ、ベラなど七種、その他鳥類も検出された。

埋葬人骨は七体確認されたが、いずれも土壙墓であった。とくに、縄文時代末期の上顎両犬歯を抜いた抜歯人骨は注目されている。

定住については、とくに弥生時代後期から古墳時代にかけては疑わしいと思われ、アワビやサザエをとる専業集団の基地ではなかったのかという推測もされている。

(6)
菜畑遺跡〈縄文前期・中期・晩期、弥生前期・中期〉（唐津市菜畑字松円寺）

衣干山から北にのびる丘陵裾野の谷あいに遺跡はあり、昭和五十五年、唐津市教育委員会の調査で縄文・

弥生時代の住居跡、水田跡、貝塚が検出された。

とくに、縄文時代晩期後半の山ノ寺文化期に水田耕作が行われたことを明らかにした意義は大きい。水田跡は畦や水路をともない、炭化米は二百五十粒が検出され、石庖丁、鍬の農具とともに木工具用の磨製石斧、扁平片刃石斧、石のみなどが出土した。土器は壺、甕、高坏などが出土している。また、アワ、大麦、ソバ、ゴボウ、メロンなども栽培されていたことがわかった。

(7)
中野遺跡〈縄文晩期、弥生初頭〉（鎮西町大字中野字出口）

上場台地北部のなだらかなスロープの丘陵上に遺跡は広がる。東西の低地には水田が開け、古くから縄文系の石器・剝片が大量に採集されていたが、昭和五十三年に発掘調査が行われて、縄文時代晩期から弥生時代初頭の集落跡であることが明らかになった。

丘陵上でほぼ円形の掘立柱建物跡が五棟検出された。住居の周辺には貯蔵穴と思われる土壙も確認された。出土した土器は、夜臼式、板付Ⅰ式・Ⅱ式の甕、壺、浅鉢など、石器では、石鏃、掻器、石錐、石斧、尖頭器、磨石、石皿、サイドブレイド剝片など計二万八千点に及んだ。

(8)
押川遺跡〈縄文晩期、弥生前期・中期〉（肥前町大字納所字押川）

低丘陵の南端部の舌状段丘上に遺跡は広がり、その南から東にかけての谷あい部に水田が開けている。昭和五十五年に発掘調査が行われ、縄文末から弥生中期にかけての住居跡、貯蔵穴、甕棺墓が検出された。

住居跡は円形か楕円型の竪穴式であり、八棟確認された。出土した土器は、甕、壺、鉢、高坏、蓋など。石器は、石鏃、片刃石斧、磨製石斧、石庖丁、石錘、磨石、敲石、石皿、砥石、掻器、尖頭器など多数出土した。甕棺墓は七基検出され、前期から中期にかけてのもので、壺を利用したものが多かった。

第五節　弥生時代の人々

第一項　激動の時代

西アジア、中国、ヨーロッパの古代文明の先進地では、食糧採集の時代→食糧生産の時代→青銅器使用の時代→鉄器使用の時代から階級社会成立の時代へと段階を経て、数千年かかって進んできた。しかし日本の弥生時代は、紀元前後の五、六百年の間にこれらの各段階を一気に経験して、統一国家へと発展した。

一万年にも及ぶ長い縄文文化に別れを告げ、弥生人は生業、生活、文化など多くの面で、新しい時代へと人間社会を前進させ、大変革を成し遂げていった。

狩猟漁労・植物採集の生活から水稲生産・米飯生活へ、獲物を追っての移住生活から定住生活へ、石器、骨角器の道具から、青銅器、鉄器の使用へ、土地や水利の所有化へ、ムラからクニへの社会集団所属の移行、人類史上初めての人間同士の戦争、大陸文化と大陸人の伝来などと初めての経験をしていった。

第二項　新しい大陸文化

弥生時代は、日本が大陸との間に恒常的な交渉をもち始めた時代であった。

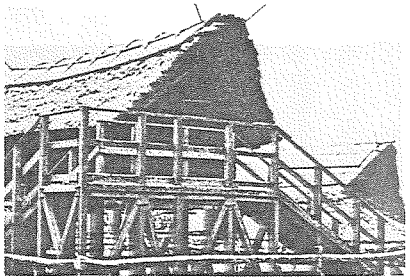
弥生時代の特色は、新しい大陸文化の伝来と、その日本化にある。水稲農耕に伴う栽培技術や農具だけでなく、高床式倉庫や貯蔵穴、支石墓による埋葬や死者に財宝を副葬する風習に至るまで、農耕生活を支える信仰・習俗も伝来した。

弥生時代を代表する石器の太型蛤刃石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧などの石製工具と、石庖丁の農具も朝鮮から伝来した。栽培したアサから紡錘車を使って糸を紡ぎ、織機で布を織る技術も伝わって、布で作った衣服を着るようになった。しかし何といっても、特筆されることは、青銅器と鉄器の使用と製造であった。

一　青銅器

弥生時代における青銅器は、朝鮮から輸入された銅剣や銅矛、中国製の銅鏡やこれを模倣して日本で製作された仿製鏡、さらに日本で独自に生み出した銅鐸などがあげられる。最古の青銅器としては、弥生時代前期初頭の銅鏃と銅剣を改造した銅鑿が福岡の今川遺跡から出土している。前期末になると、朝鮮半島から銅鏡とともに銅剣・銅矛などの細形青銅武器が、北九州を中心に輸入された。中期初頭には、独自の青銅器の国産化がはじまったが、武器としての利器から武器形祭器へと日本化していった。音を出すカネであった銅鐸も実用から離れ、装飾をもち大型化した祭器にかわっていった。

青銅器の祭器化は、稲作農耕社会の発展を支えてきた日本人の精神的な象徴であった。その典型が銅鏡である。シャーマニズムの太陽崇拝と結びつけ、太陽神を象徴する呪具として青銅鏡が珍重された。



高床式倉庫

銅鏡でまず玄界灘を渡ってきたのは多紐細文鏡であり、弥生時代の前期末(紀元前二世紀)のころであった。この鏡は唐津市の宇木汲田遺跡でも墓に副葬されていた。

二　鉄　器

青銅器が弥生人の精神生活の象徴として発展した一方、鉄器は弥生人の生活を支える農具や工具などの利器として発展した。

日本の鉄器時代は、舶載の加工用木工具である小型の手斧、刀子(ナイフ)から始まった。鉄器も前期前半からすでに使用されていたが、北九州では前期末から中期にかけて木工具や鏃の国産が始まっていた。

鉄製品の種類は、農具、工具、武器、祭器、漁具、装飾品など多種類あったが、中心となるのは、利器としての工具、農具であった。

第三項　渡来した弥生人

低身長で、顔がすづまりで、両眼の間がせまくて落ちこんだ顔立ちの縄文人に比べ、北九州には面長で鼻が高く、全体にのっぺりとした感じの弥生人が登場していた。縄文人男子の身長が一五九～一六〇㌢(女子は一五〇～一五二㌢)であるのに比べ、弥生人男子は一六二～一六三㌢と二㌢ほど高かった。古墳時代になると、また縄文人の身長まで戻っていた。この弥生人の身長は朝鮮南部人の身長とほぼ一致していたことや、北部九州の長身集団の住んだ地域が弥生文化をいち早く受け入れた所に限られていることなどから、北九州を中心に現れた長身の弥生人は、弥生文化の開始の時に稲作農耕をもって渡来した朝鮮半島の人々であったとみられている。この渡来人は

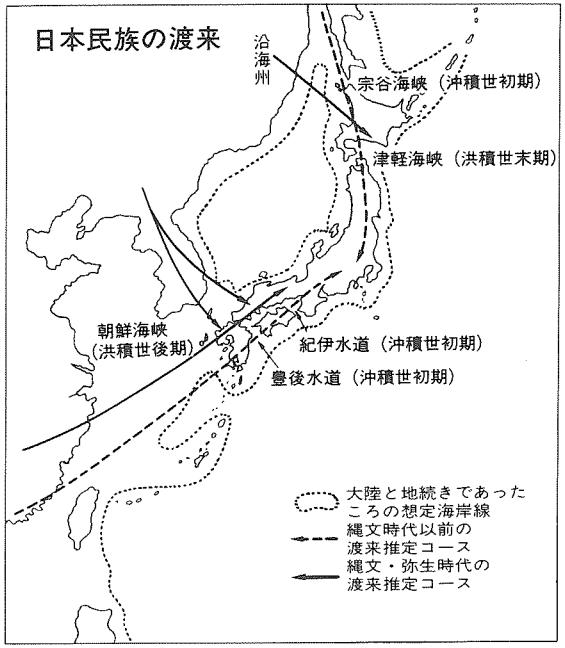
先住の縄文人と混血していった。

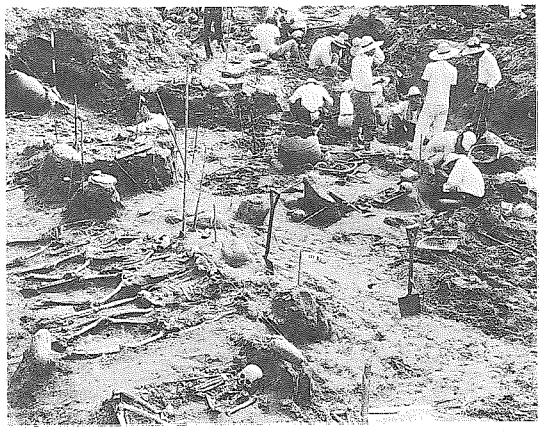
※『日本の美術』「弥生時代」(木下正史)

呼子町大友遺跡の弥生人は、男子身長一五九・〇六㌢、女子一四九・〇㌢で低身で、顔立ちは寸づまりで頑丈さはなく、抜歯の風習も根強く、典型的な縄文タイプ人であった。※

※『末盧国』大友遺跡「人骨」(内藤芳篤)

日本民族の渡来図





呼子町大友の弥生人骨遺跡（昭和45年8月発掘風景）

第四項　土器

一　土器の伝統

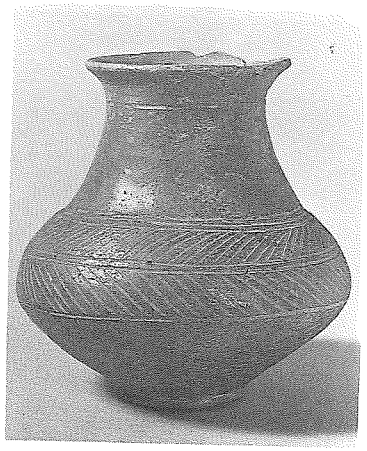
新しい弥生文化は水稲農耕とともに伝来したが、今までの縄文文化をすべて捨ててしまってはいない。

縄文晩期の土器文化は、後期の土器の系統をひいており、黒川期と山ノ寺期の前後二時期に大きく発展していた。米の貯蔵用として登場した壷は、少しではあるがすでに黒川式土器の中にその祖型をみることができ、この伝統をうけて山ノ寺期になると、壷は大型になり、丹塗磨研の手法もあらわれ、この手法は弥生時代へと引き継がれた。夜臼期は短く山ノ寺式との形式的な違いは少ないが、それでも壷の底部が厚い平底になったり、低い高台をもったものが一般的だった。

二　農民の土器

食糧採集民が使う土器は食物の煮沸用の深鉢に限られているが縄文土器もその誕生からのほとんどは深鉢が主体であった。水稲農耕に生活の基礎をおく弥生人にとっては米やその他の食料を保

夜臼式土器



弥生式土器

存するため、食料貯蔵用の壷が必要になった。

煮沸用の甕や食器としての鉢のほかに、食料を盛り合わせる高坏も必要となった。農耕社会の弥生土器は、鉢、壺、甕、高坏など種類は多いが中期になると稲作農耕社会が確立し農耕祭祀が盛んになるにともない、壺、甕、鉢は大小のものがそろい、高坏も主要な土器となり、壺や鉢に台をつけたものや台だけが独立した器台も登場してきた。

弥生土器の特徴は、均整のとれた形や簡素な文様にあるが、それは日常生活の用途の中で生まれた機能美だといわれた。

第五項　生産力の発展と富の蓄積

水田農耕の定着で食糧生産量を大幅に高めたことは、集落の増加や人口増の点からも推定される。人口推計では、紀元一年ごろは三十万人といわれ、縄文時代の三万人からみると十倍へ、紀元前二百年の十万人と比べると三倍増している※。この二百年間の増加率は、日本歴史の上で、十九世紀以降現在までの二千八百万から一億二千万人の約五倍の増加率につぐ二位の記録になっている。

※鬼頭清明　朝日百科『日本の歴史41』

生産力の発展は、この人口増とともに、人類の歴史上始めて、人の間に貧富の差を生み出し、支配者と被支配者をつくりだした。倭人伝にいう　大人、下戸、奴卑はそれをあらわしている。

水稲農耕は計画的な生産の安定と生産の拡大を保障し、生産物の蓄積を可能にした。余剰生産物の増加は、農

耕生産労働に従事することを免除した。免除された労働者は、食糧生産労働にかかわりのない祭器生産や武器生産の労働に消費されるようになり、支配者の富の蓄積を築いていくことに貢献した。

第六項　郷土の弥生人

一　弥生時代の上場

食糧採集民である縄文人にとっては上場台地はよき生活の場であったが、水稲農耕に生産基盤をおく弥生人にとっては水田の確保ができないので、上場を離れていった。上場の遺跡は弥生時代になると激減し、沿岸部の沖積地へと生活の場は移っていった。それでも鎮西町中野遺跡や山頭遺跡、肥前町の押川遺跡のような台地上の凹地で水に恵まれた湿地近くでは、小規模ながら集落が営まれていた。

沿岸部の弥生遺跡としては、玄海町今村の八ッ田浦遺跡、鎮西町波戸鳥ノ巣遺跡、呼子町大友遺跡、唐津市湊鼓遺跡、小川島貝塚遺跡などが知られている。狭い沖積地に生活する人々はわずかな水稲農耕に頼るだけでなく、豊かな海にも生産手段を求めていたようだ。末盧国が倭の玄関口として大陸文化を摂取する際に、海上交易の立役者としてこれらの人が活躍したかもしれない。

唐津・東松浦地方において弥生文化の中心は、鏡、半田、宇木、柏崎、久里地区の松浦川流域であった。

二　高地性（戦闘的）集落遺跡

日本列島における人間の最初の戦いは北部九州で始まったといわれている。紀元前二世紀から一世紀にかけて、石剣や石戈、弓矢を武器にしていた。福岡県から長崎県にかけて、武器の先端部がつきささった人骨が発見され

ている。平戸では戦いにまきこまれたものか、女性の例もみられる。ムラのオサになる際の決闘、土地や水利をめぐっての争い、米など貯えの奪いあいなどが原因になったことだったろうか。

村の周囲には濠や防壁をめぐらして村を防御する施設を作っていた。『魏志倭人伝』には二世紀の後半に、倭国に大乱があったことが記述されているし、邪馬台国と狗奴国の戦いも記載されている。

山口、広島、岡山、愛媛、和歌山、大阪を中心にした瀬戸内・紀伊水道ぞいに、山地・山腹や台地上に弥生時代の集落跡がある。特に弥生中期後半以降のころのものが多く出現する。これは「防御的な施設をもった城」「逃げ城」として低地の弥生集落がつくったものといわれている。※

唐津市教育委員会によって発掘調査された湊中野遺跡も高地性集落と思われ、焼土壙はのろし台と推測されている。※※ 唐津市神田の日暮遺跡、管牟田Ⅲ遺跡なども高地性集落と考えられる。

※『魏志倭人伝の世界』祭政女王・卑弥呼P197（山田宗睦）　◆※※　湊中野遺跡（田島龍太・一九八五年）

第七項　周辺の遺跡

一　柏崎貝塚（唐津市柏崎字石蔵一二〇九番地）

柏崎段丘の西側斜面に、径九メートル層の厚さ二〇～三〇センチの範囲に貝塚が広がる。昭和三年に発見された。最下層から始源期の土器を検出した。この土器は柏崎式土器と命名されたが今いう夜臼式土器である。貝層からはハマグリ、シジミ、カキ、サザエが多く、獣骨ではイノシシやシカが多かった。

二　宇木汲田遺跡（唐津市宇木汲田）

松浦川の支流である宇木川流域に遺跡はある。大陸文化伝来の門戸として古くから注目され、多くの青銅器を出土した。末盧国の中心地と推定されている。

昭和二十五年の調査以来百二十九基の甕棺墓と三基の土壙墓が検出され、弥生時代前期、中期、後期にわたる墓地であり、唐津地方を代表する弥生遺跡となっている。

三　葉山尻支石墓（唐津市半田字葉山尻一五四二番地）

支石墓は中国の山東半島、東北地方（旧満州）から朝鮮半島、九州にかけて分布する金石併用時代の墓制の一つ。※

丘陵の北斜面に支石墓六基と甕棺二十六基が確認された。支石墓は弥生時代初期から中期にかけてのもの。支石墓の内部主体は甕棺、土壙、石棺が確認された。※※

支石墓は、瀬戸口（宇木）、森田（宇木）、岸高（半田）、迫頭（宇木）、五反田（浜玉町）、徳須恵（北波多）などに分布している。

※『日本考古学辞典』支石墓（三上次男）　◆※※『末盧国』葉山尻支石墓（渡辺正気）

四　桜馬場遺跡（唐津市桜馬場四丁目一二八五）

昭和十九年防空壕を掘っている際に発見された。弥生時代中期から後期にかけての甕棺墓の遺跡であり、方格規矩鏡は各々四十三文字と二十一文字の銘文をもつ舶載鏡。楯や靫につける金具と思われる巴形銅器は南海産のスジガイに、銅釧の鉤はゴホウラの貝輪にヒントを得たもので、南海産の貝の刺に呪力があるという考えの影響であろうといわれている。※これらの桜馬場出土物は大陸文化と南方文化を直接に享受している点でその価値は高い。

方格規矩鏡、巴形銅器、銅釧は国の重要文化財に指定されている。

※『末盧国』桜馬場遺跡（岡崎敬・一九八二年・五月）

五　大友遺跡（呼子町大友字畑田九〇一七番地）

遺跡は大友海岸の砂丘上に広がり、弥生時代前期から中期、後期にいたる共同墓地。甕（壺）棺、箱式石棺、支石墓、土壙、配石、石囲いの埋葬法による百六十四基の埋葬遺構が検出された。この多様な埋葬方法は他に例がなく注目されている。

装身具のゴホウラ、イモガイ、オオツタノハ、ベンケイガイ製の貝輪も豊富であり、鯨類の骨製釧、巻貝製装飾品もあった。中でも南海産の貝輪は、集団の南方との強い交流を物語っているという。

人骨も多く検出され、二十二体に抜歯の風習がみられた。大友弥生人は西北九州弥生人と同様に低身、低顔を特徴とし、縄文的要素を強く残している集団であったという。※

※『末盧国』大友遺跡（内藤芳篤）

大友遺跡（昭和45年８月発掘）

六　押川遺跡（肥前町大字納所字押川）

押川遺跡は早くから縄文、弥生時代の遺物の散布地として注目されていたが、昭和五十五年に県教育委員会により発掘調査された。※遺跡は三方を湿田で囲まれた南向きの低丘陵上に広がっていた。

弥生時代の遺構として、住居跡、貯蔵穴、甕棺墓が検出された。住居跡は八基検出され弥生時代前期末から中

期初めにかけてのものであった。

押川弥生人の経済基盤は、周囲の水田耕作を主としながらも、狩猟、漁労に頼っていたことが多数の石器でわかった。（前記、縄文時代の項参照）

※『押川遺跡』佐賀県文化財調査報告書第六〇集（森田孝志）

七　波戸鳥ノ巣遺跡（鎮西町大字波戸鳥ノ巣）

波戸一帯には多くの遺跡が分布していることが以前から知られていたが、昭和五十六年に鎮西町教育委員会により発掘調査が行われた。弥生時代中期の竪穴式住居跡と甕（壺）棺墓が検出された。

経済基盤は、押川と同じく、狭い谷田での水田農耕、狩猟、漁労に頼っていたものと思われている。

八　八ッ田浦遺跡（玄海町大字今村字杉）

八ッ田浦遺跡は開発にともなって破壊されたが弥生時代中期の墓地であった。甕棺墓と石棺墓が海岸線より二〇㍍程の陸部の海抜三㍍の砂礫地で、地下一㍍付近から出土した。※甕棺は値賀中学校に、人骨は九州大学に保管、石棺は唐津市歴史民俗資料館に展示されている。

※「佐賀県遺跡台帳」（富桝憲次・河児哲司・一九七二年・三月）

九　浅湖遺跡（玄海町大字今村字浅湖）

弥生時代の墓地があった記録は残っているが詳細は不明である。※

※「佐賀県遺跡地図」玄海町（佐賀県文化課）

八ッ田浦遺跡石棺墓

第二章　古代のころ

第一節　古墳時代

第一項　古墳文化

一　古墳について

縄文時代や弥生時代の名称は、「縄文式土器文化」あるいは「弥生式土器文化」の土器をその時代を代表する文化として選んでつけられている。奈良時代や平安時代の名称は、政治、経済、文化の中心であった当時の都の名からつけられている。古墳時代の名称は、墓である古墳の文化からつけられている。

では、古墳とは何か。古い墓、墳墓、荒墳、塚、高塚などと類似語が多く、いろいろ呼ばれてきたが、古墳とは高塚式墳墓を指している。それは一般大衆の墓ではなく、当時の社会集団の支配者の墳墓であり、文化や習俗だけでなく政治や経済をも反映させている。個人や家族の墓でも被葬者の名はごく一部を除いてほとんどがわか